

〈調査報告〉

国頭村奥むらの戦争体験（3）

宮城 能彦

要 約

本稿は沖縄県国頭村奥集落の人々の戦争体験の聞き取り調査（第2回および第3回）の記録である。戦争体験を語ってくださった方は、国頭村奥の出身者あるいは沖縄戦当時奥に在住していた方々である。今回は、小学校3年生の時に奥で戦争を体験した方、戦前、農業指導員として奥にやってきた後沖縄で結婚し、奥の人々が米軍に投降する際に命がけの重要な交渉をした方（故人）の家族の方、護郷隊として敵へ切り込む直前に解散されて奥まで命がけで帰ってきた方の3人のお話を収録した。本稿は、奥という沖縄本島北端の集落から見た沖縄戦を、ライフヒストリーとして記録することによって、沖縄戦を様々な角度から考えようとするものである。

キーワード： 沖縄戦、国頭村奥、投降、公衆衛生、茶業、護郷隊

はじめに

本稿は、沖縄県国頭村奥集落の人々の戦争体験の聞き取り調査（第2回および第3回）の記録である。聞き取りは、第1回を2010年6月19日と20日に国頭村奥の奥民俗資料館で、第2回を同じく国頭村奥の奥民俗資料館で2011年2月11日に、第3回を2011年3月12日に那覇市真地公民館にて行った。インタビュアーは筆者および元奥区長で「奥のあゆみ」を編纂した島田隆久氏。記録はボイスレコーダーによる録音およびビデオ撮影によって行った。

文字起こしおよび編集は筆者が行い、地名や人名の表記については島田氏に見てもらった。本研究は、奥という沖縄本島北端の集落から見た沖縄戦を、ライフヒストリーとして記録することによって、沖縄戦を様々な角度から考えようとするものだが、今回は紙数の関係で、第2回のインタビューから平良幸雄氏、第3回から小山安子氏と糸満盛明氏を掲載した。

1. 少年の戦争体験と戦後の公衆衛生

平良幸雄（昭和十一年早生）

（平良）本当の生年月日は昭和十一年の早生まれで昭和十年生と同じ学年なのですが、昭和十一年生と一緒に学校をでました。戦争の時は小学校（国民学校）三年の時です。

（宮城）一番覚えているのはどんなことですか？

（平良）まだ小学校三年でしたが、妹をおんぶして山の中を一日中山の中を歩いていて覚えています。一晩休んで次の日はまた歩きました。西から上がって東に回って。最終的には東の山の中に落ち着きました。二～三か月おりました。

食糧がない時ですから、小学校三年生でも、塩を焚きあるいは食糧を取りにやらされました。

(宮城) 子どもが塩田焚きもしたのですか？ 兵隊がやっていたというのは聞いたことあるのですが？

(平良) はい。塩がないですから。焼け残った家屋に夜に行って、何でも燃やしました。そんなにたくさんはできないですよ。(食べ物に)味を少しつけるくらいですよ。手のひらくらいだったんじゃないかな、わずかなものです。これを使い果たしたら、今度は海に行って塩水を一升瓶に入れて持って帰って味付けに使いました。これは僕ら小さい子どもの役割。

(宮城) 一晩中塩田焚きをしてもそんなには塩はできないですよ。シンメー鍋を使ったんですか？ 何度も海水をつぎ足して？

(平良) はい。シンメー鍋で。海水汲むのは一、二回だけです。だからほんのわずかしかできない。

戦争中山の中に避難していた時よりも、戦後、捕虜で辺土名へ行って帰ってきた後の方が一番苦しかったです。避難していた時はある程度食料の蓄えもあったんですよ。お米もあったし、戦争中座礁した船から食料を勝手に取りに行くんですよ。それがあったから、奥の人はわりと助かったのだと思います。乾麺(かんめんぼう・旧陸軍の乾パン)とかジャガイモとか、食料がありましたから、周辺の避難民が皆で食い尽くしたのではないですかね。

(宮城) 平良さんも取りにいかれたのですか？

(平良) 子どもは行かなかったです。さすがに。ものすごい絶壁の所に座礁しましたから。あれは、昼には逆に歩けないところですよ。夜だから這って行けたと思います。夜は(米兵から)見えないから。

辺土名での捕虜生活は一月くらいじゃなかったですかね。歩いて帰ってくるのは普通でも子どもが一日かかる距離ですが、僕らは3年生、4年生ですから、自分の持ち物と弟、妹をおぶって一日中歩いて帰ってきました。道路は無いです。人が歩けるだけの道です。

帰って来たら、自分の家は無くなっているから、親戚の家に間借りして一緒に住みました。そこに住みながら芋や米を作るために田畑を耕すのですが、一年間ほったらかしていた田んぼで食糧を作るのは本当にたいへんでした。あちこちにある畑でなんとか芋をつくるという感じでした。そういう苦勞をしてようやく落ち着いたのが昭和二十三年くらいだったと思います。三年くらいかかりました。

(宮城) 学校へは行けたのですか？

(平良) はい。でも校舎はありません。木の下で、青空教室です。

行政がどうしたのかはわかりませんが、自分たちの共同作業で茅葺きの長屋の校舎を三つくらい造りました。窓も開けっ放し、戸もなく、豚小屋みたいなものです。卒業までその校舎でした。台風で壊されることはありませんでした。屋根がついているだけです。壊れようがなかったです。

その時の教育は、勉強するというより、どうやって食糧を作るのかというのが主でした。3年生以上は各学年に畑が割り当てられていて芋や野菜をつくりました。上級生はお茶畑もありました。そういうのに力を入れていたようです。だから僕らは何もわからなかったです。教育の基礎ができていないのですから、5、6年生になっていきなり分数とかがでてきても全くわからなかった。だから、卒業してから一生懸命勉強しました。

(宮城) 戦争前には奉仕作業だけでほとんど授業らしい授業はなかったという話はよく聞きますが、戦後も同じだったのですか？

(平良) はい。戦後も同じでした。戦前は、石部隊の炭焼き部隊十四、五人から二十人くらいが校舎に駐屯してましたから、炭の供給関係の仕事が生徒の役割でした。炭を束ねる縄を編ん

だり籠を作ったり、一日一人五十尋（ひろ、両手を左右に広げた時の長さ。六尺（約1.8メートル））供給するのが小学校3年生以上の義務でした。だから勉強どころではなかったです。

戦後も勉強にはあまり熱心ではなかったですね。今考えると先生方もそうだったと思います。学校を休んでも農作業はしなさいと言われたくらいですからね。

僕らの学年から、六三三制になったので、（小学校六年生を終えて新制の）中学校に行きました（それまでは八年制の初等学校までが義務教育）。校舎は中学三年の二学期までは今の小学校の敷地でしたが、その後、今の琉大の山荘がある所に中学校の校舎ができましたが、卒業まで茅葺き校舎でした。

新しい中学は瓦葺きでしたが、戸はないしとても寒かったです。毎日二時間くらいは開墾作業でした。勉強どころの話ではなく、どうでもいい感じでした。豚やヤギを養ったり開墾したりで半分も勉強しなかったです。

国頭村、東村、大宜味村をまとめた辺土名地区教育委員会というのがありましたが、先生方は、そこからの文書を取りに生徒を辺土名まで行かせてました。バス停は宜名真までしかないからそこまでは歩きです。郵便局があるので郵便で配達すればいいのに。「今日は誰が行きなさい」と平気で先生方は生徒をやらしてました。僕もよく取りに行きました。そうこうしているうちに、あつというまに中学を卒業しました。

卒業後は、親戚の人が郵便局にいて、ちょうど配達員が那覇に転居していないということで、僕がやることになりました。一日八十円（B円）。ただの八十円ですよ。ドルになってから月給で十何ドルになりました。ドルになって九年くらい郵便局にいました。

一九六二年くらいに郵便局を辞めて名護にいて勤めました。教育もあまり受けてませんからどうなるかと思ったのですが、ちょうどオリオンビールの工場ができた頃です。運転免許を持っていたからとても助かりました。ビール工場で働くか公務員になるかと迷っていたら、知り合いの勤めで公務員になりました。ビール工場の方が給料はよかったです。ちょうど保健所と病院関係で運転手の仕事があるということで、それから三十二年くらい病院関係の仕事をしました。

（宮城）運転免許はいつどちらで取られたのですか？

（平良）名護に行ったばかりの時に、那覇の波之上に通って取りました。

勤めるようになってから色んなことをしました。その頃キャラウェイの時代、大田主席になったばかりの頃ですかね。ブルドーザーで奥まで道ができたのですが、あまり立派な道ではありませんでした。一度だけ名護から奥に見に来たことがあります。あまり親にも会いに来なかったですね。

その頃は運転免許を持っている人があまりいなくて、色んな仕事をしました。色んな仕事ができる会社にいたんです。最初は裁判所で一年くらい、その後オリオンビールに一年、それから保健所、そして病院に行きました。あまり悪い仕事はしなかったですよ（笑）。

その時分、やんばるでは運転免許を持っている人があまりいなくて、僕は（免許を取るのは）早い方でした。そういうことで仕事には困らなかったですね。

（宮城）那覇へ通うのはたいへんではなかったですか？お金も。

（平良）毎日那覇に通いました。

その時分は、アメリカは病院とか保健所に力を入れていました。病院と保健所はいっしょ（併設）でしたが、病院には二人か三人しか先生がいなかったのに保健所には四、五人先生がいました。結核やマラリヤ、フィラリアの撲滅をしようという三本柱があったようです。

例えば、TB（結核）の係、VD（梅毒）の係、それから精神の係、そういうものにアメリカは

力を入れていました。アメリカの厚生局みたいなところのワーターワーという長官から毎日保健所に指導がありました。

それで、各家庭を廻って便所や沼の消毒、それから、夜間の噴霧消毒をやりました。それはフィラリヤやマラリアを撲滅するために、蚊の発生源を無くするためのものです。消毒班というのが一つの保健所に四十名くらいいました。それを二、三十人くらいの二つのチームに分けてトラックバスに乗せて北部全地域を廻りました。

そのほとんどは軍からの無料の薬でした。この薬をまくおじさん達を載せて運転して、各部落に降ろすんですよ。その後迎えにいくんです。衛生課というところでそういう仕事を何年か続けました。

看護婦さんは三年間の教育を受けた後にあと二年、合計五年間の教育を受けないと保健婦、今では保健師、になれないのですが、結核とか精神の病気とかフィラリヤやマラリアを撲滅するためには保健婦を増員しなければならないということで、たくさんの看護婦さんたちにそういう教育を受けさせていました。

また、当時米軍が許可する A サインバーで働くためには保健所での検査が義務づけられていてうるさかったです。梅毒の検査とか。そして病気をうつされた人は誰からうつったのかを必ず調査されよかったです。保健所は必ずその店に行って調査しました。私も医者車を車に乗せてよく A サインバーに行きました。

当時、日政援助と言って、日本政府から結核患者への援助がありました。沖縄では治療できないものですから、各地域から何人という割り当てがあって内地へ治療へ行くために送ったりお迎えしたりということもしました。

(宮城) それは米兵に病気がうつらないようにという政策ですよ。

(平良) そうそう。だから、公衆衛生への考え方が日本とは違っていました。私はそういう関係の仕事でずっと運転手をしていました。

今は希望者ですが、当時、予防接種は義務でした。それはほとんど米軍の援助と日政援助でした。小児麻痺のワクチンを打つときには、離島には米軍が必ずヘリコプターを二機飛ばしていました。無償だったかもしれませんが。伊平屋島、伊是名島、伊江島を一日で廻りました。私も二回ほど乗りましたが、乗る前に「もし墜落しても保証はありません」という書類にサインをしました。

(宮城) 名護保健所の管轄はどこまででしたか。

(平良) 恩納村まで、金武村と久志村は当時は石川保健所の管轄でした。読谷の近くに塩屋とか宇梶という部落があります。その辺りはほとんど知っています。

当時はほとんど舗装されていないのでホコリだらけで、トラックの後ろに乗せたらみんな真っ白になっていました。雨の日にタイヤを取られたとかはほとんどありませんでした。いつも日帰りです。ほとんど三時頃には引き上げました。

奥に戻ったのは今からまだ十年にならないです。二十四歳からずっと名護でした。

(宮城) 戦争中に避難していた時より戦後の方が食糧が厳しかったということですが。

(平良) 子どもの感じ方と大人とは違うかもしれませんが、戦争中に避難していた時は食いのに関する苦しみはあまりなかったですね。空襲で焼き払われた後は、牛やヤギやあちこちに逃げてますので、それを取って潰して食べていました。当時はみつけたら誰でもとっていいと自然にそういう決まりになっていました。そういうものがご馳走のように僕らは感じました。今よりも牛肉をたくさん食べたんじゃないかなあと思うくらい、毎日牛肉でした。また、近くで牛を捕まえたと聞いて行ってみると肉がもらえましたから。お金はないですからね。

避難民は奥だけでなく、中南部からも来ていました。一番可哀想だと思ったのは勝連半島の人たちでした。強制的にやらされた人もいたと思います。奥に来てても、食べ物を供給し続けることができないです。最初のうちは、奥の戸あたり三箇から五箇ずつ芋を供出しなさいと言われていましたが、ずっとはできないですよ。耕地面積もそんなにないですから。その人たちはしばらく奥部落が造った共同避難小屋などにいましたが、そこから逃げて別のところへ行きました。ここでは食べていけないということではないでしょうかね。その後、また別のところから追い詰められた人たちがやってきました。

（宮城）子どもと大人では感じ方が違うというのは？

（平良）親たちは、いつ殺されるかという不安があったと思うのです。ところが、私たちは、どこで機銃掃射があったとか、どこの船から艦砲が飛んできたとか、爆弾が落ちたとか、そういう情報があつたら避難小屋から出て高台に見に行っていましたからね（笑）。

アメリカ兵は勤め人と同じで、朝八時になると同時に辺戸岬の駐屯地からこちらに探査にくるんですね。どこに何名来たかということは部落の見張りをする人から連絡がありました。山の上の道と海岸の道しかありませんから。アメリカが帰ったという連絡があつたら、子どもたちは部落へ行って、荷物をとったり塩を汲んだりしていました。恐いということはありませんでした。

一番苦しいなと思ったのは辺土名の収容所から帰ったあと食糧がなかったことです。ソテツも食べました。もちろん芋も。米はないです。リバック物資というのですかね、アメリカからの食糧の配給がありました。缶詰とか麦とか豆とか、後からメリケン粉もありましたが、そんなに多くはないです。着るものもありませんでした。毛布とか蚊帳とか一家に一つの配給でした。

（宮城）戦後の方が食べ物がないし重労働だしということですよ。

（平良）人間は食べ物さえ豊かにあれば、そんなにお金が無くても暮らせると思います。食べ物だけは本当に苦しい思いをしました。

というのは、戦前は三百から四百しかいなかった奥の人口が、戦後は海外とか内地などからたくさん引き上げて来て千人くらいになっていたんじゃないですかね。

（宮城）統計では最高一千二百人くらいになっていますね。

（平良）そうですね。それだけの人の食料を確保するのはたいへんだったと思います。辺土名の次に奥が人口が多かったです。

昭和二十五、六年頃には、ようやく（共同店の）船ができて、三十トンくらいの小さな船ですが。それが毎週一回那覇まで行きました。材木や竹などを載せて。その頃からようやく物資が豊かというほどではないですが、物があるようになってきました。というのは、那覇から積んだ物資が直接奥に来ますから。その頃は奥那覇と言われて、那覇の生活のまねしているとか言われました。その頃でしょうね。ようやく生活が落ち着いてきたのは。

（2011年2月11日奥民俗資料館にて 聞き手：島田隆久：宮城能彦）

2. 奥の救世主小山松美さんのこと

小山安子

(小山) なにもわかりませんが、少しでも皆さんのためになるならお話したいと思います。よろしくお願いします。

(島田) 私からちょっと質問します。山から下りた日を覚えておられますか？

(小山) 山から下りた日は、八月三日です。うちの長男が生まれた日だから覚えています。前の年の昭和19年に八月三日に那覇で生まれました。だから、この日は今でも忘れないです。奥の山に隠れているときにちょうど八月三日の日がきましたから、こんなめでたい日に山には居たくないと思いました。

海にスクガラスを採りに行った時にピジー(岸・イノー)の上に座っていたら、米軍の飛行機が低空でやってきたけど何もしなかったそうです。それで、これは完全に戦は済んでいるし、めでたい日なので自分たちだけでも山から下りると決め、勝手に下りることはできないから、みんなに相談したら、「それならみんなで下りよう」ということになって下りたわけです。

(島田) 下りるときには、当時の区長さんと学校の校長先生、そして小山松美さんの三人が白旗を持っておりていったわけですよね。その白旗はおばあのハンカチだと書かれています。

(小山) はい。何を忘れてもこういうのは忘れませんよ。大事なものですから。

その時に、「あなたが下りていったら私たち母子だけになってしまうから止めてくれ」と言いました。そしたら、「アメリカ人はアングロサクソンだから・・・私は英語はよくわかりませんが・・・アメリカ人は人の命をそう簡単には殺めないから大丈夫、もしもの時は自分が真っ先に犠牲になるから」と言って先頭に立って山を下りました。

(島田) 昨日、奥在住の仲間貞子(昭和8年生まれ)さんに、「あす小山のおばあに会って話を聞くよ」と話したら、小山さんとは山の中では隣どうしで、小山松美さんがいつも言っていたことは、「アメリカ人というのは心の広い人たちだから、日本の兵隊みたいに悪いことはしないから早く降参して山を下りた方がいい」ということだそうです。このことは私も昨日はじめて聞いて感動しました。ヤマトは神風でアメリカは鬼畜生とばかり聞かされていた頃に、小山松美さんはすでに世の中を読み切っていたということですね。

(小山) その通りです。

(島田) なんで小山さんは英語ができたのですか？

(小山) 英語と言うほどのものではないですが・・・

(垣花ツヤ子 ※戦前小山家で子守をしていた)

とても向学心がある方で、英語ができるものだからアメリカ兵に信用されたんだそうです。独学らしいです。

(小山幹太・小山さんの孫) 日本の農業だけでなく、近代農業を学ぶためには当時は英語の本しかなかったために独学で学んだようです。もともと農業指導員として沖縄に来て、お茶栽培の普及で奥と縁があるわけですから。

(島田) 山から下りるときの話をもう少し。当日は大雨の後でしたよね。長男は歩きよったの、おんぶしたの。その辺りの話を聞かせてください。

(小山) おんぶですよ。

その前に宮城親栄さんのことを話させてください。みんなで相談して山を下りることになりましたが、親栄さんの二十一歳の長女のエイ姉さん(大正11年生・東大屋〈アガリンブラ〉)

は子どもさんがいなくてまだ一人でした。女の子が一人の場合はアメリカ兵に引っ張っていかれるというので、いままでおった山よりさらに遠いところへ隠れにいったのですよ。ところが逆に先にアメリカ兵に親栄さん一家は捕まってしまうました。着の身着のまま捕まってしまったのはたいへんだから、アメリカ兵と交渉して親栄さんを借りだして家族の食料や荷物を運ばせようとしたのです。

隊長のいる神社まで行って、手真似で、親栄さんを明日の朝みんなで下山する時まで貸してくれ、責任は自分が持つから。もし約束を守らなかったら自分の首を差し上げるからとお願いしたそうです。そしたら隊長はOK！OK！と言ってくれたので、捕虜になっている親栄さんを学校で見つけ、あんたを借りに来たよと言ったら、すでにそこで捕虜になっていた十人ほどの人がそれを聞いて、私も私もと言って先に逃げ出してしまい、学校には親栄さんとうちの主人だけが残されてしまったそうです。それでも、アメリカ人は人は殺さないから、安心して行こうと言って親栄さん家族を助けたそうです。

山から下りることになっていた八月三日の朝は大雨で下りることができず、時間を延期してくれと交渉しにいったそうです。英語で雨のために下りられないと説明して、それで、下りるのは夕方になりました。

私は子どもをおんぶして下りましたが、そばに通訳としてハワイ二世がいました。後から聞いたのですが、私たちは目をつけられていたようです。でも、私を心配させないようにと主人は黙っていたようです。英語が生半可にわかるとかえってよくないなあと主人は思ったそうです。

（島田）山から下りて、浜を歩いて、宇座浜というところで車に乗ったんですね。

（小山）そうです。辺土名の兼久に放られて、私たちは宮城親栄さんを頼って、親栄さんは家族が多いから大屋（うふや）に入って、こちらは親子三人で入るところが無いから牛小屋に入りました。そこはいい具合にコンクリー屋（コンクリート造り）でした。

（島田）その後、奥の人たちは十月五日に奥に帰ったのですよね。小山の家はその後どうなりましたか？

（小山）うちは辺土名に六か月くらい居ました。主人はじっとしている人ではないから、ハワイ帰りの多和田さんから少し畑を貸してもらって、親子三人できれいに耕して小さな田んぼを作りました。しかし、やっと稲を植えられるようになった頃に私の実家のある石川へ行くことになりました。石川に居る私の母親が石川の市長から私たちを呼び寄せる許可をもらい、辺土名市長へ届け出てその許可が下りたので、那覇行きの車が出ることになって、その車で親子三人一緒に石川に行ったのです。

だから、みなさんよりは比較的遅くまで辺土名にいました。

その稲を多和田さんは、「あなた方が苦勞して作ったんだから」と言って、わざわざ辺土名から石川まで持ってきてくれました。当時は定期のバスが無く、「拾い車」と言って、軍の車に乗せてもらっていたのですが、食料にたいへん困っている頃でしたから、そのお米はとても助かりました。

主人は、昭和六年に奥にお茶の栽培を指導に来たそうです。その時私はまだこんな小さい頃です。沖縄で一番最初にお茶の種をまいたのは奥で、二番目は石川の山城、そして三番目は私たちの具志川、その次が楚南、そしてまた具志川。五カ所くらいだったそうです。

私は子どもができる前に疎開しようと思っていたのですが、うちの母親は、「沖縄にはまだこんなにたくさん人がいるのに、あなたたちはなぜ自分だけ疎開しようとするのか。身重で疎開してはいけない」と止められました。親の言うことを聞いて、長男を出産した後に切符を買い、荷物はみんな栈橋に運んで、あと3～4日くらいで船がでるといいう時に十・十空襲に遭ったの

です。

普段は、赤い練習機が飛んでいたのですが、その日は赤い飛行機は飛ばなくて黒い飛行機が飛んでいたのです。これはただ事じゃないと思いました。時間も覚えています。十月十日の七時十五分に朝ご飯も食べずに家をでました。近いうちに大和に疎開するから、その日は中城の公園まで散歩に行くことになっていました。赤飯を羽釜にいっぱい炊いて持って行く予定でしたが、結局何も食べずに、空腹のまま家を出ました。

夕方になると、青年団が「身よりのある方は早めに避難してください」と呼びかけていました。私は実家が具志川ですが、夜通し歩いて着いたのは翌朝でした。

具志川の私の部落には精米器もお茶を作る機械もあったのですが、男の人が居ないから荒れ放題で使えなくなっていました。食料も無く、具志川に居てもしょうがないから、その後知花に行きました。

友軍はお米を玄米でたくさん持っていました。あの山にもこの山にも、カバーを掛けて。ところが、精米器が壊れて使えない。それで、主人が友軍からハンマーやガソリンを借りて精米器を修理して使えるようにしたのです。そのお礼にお米をたくさんもらいました。その後、そのお米を持って奥まで逃げ、奥の山の中でなんとか生きて行けたのはその時のお米があったからです。

宮城忠雄（大正9年生・東前里〈アガリマエサト〉）さんはお茶の関係で兵隊に行かなかったようですが、彼が牧場から逃げ出した牛を捕まえて、足を一本持って来てくれました。お米とその肉があったから食べるのに不自由なくしのげたのです。

（小山幹太）じいさん（松美さん）のことを補足しますね。元三重県庁所属の農業指導員でした。当時、土地が無い、水が無い、土地がやせている沖縄で、なんとか県外に出荷できる農産物は作れないかということで注目されたのがお茶なんですね。沖縄でお茶を作って県外に売ればいわゆる「外貨」を稼ぐとができる。

三重県の県庁職員から国家公務員になり、沖縄に赴任して業績をあげれば出世ができるということで沖縄に来たのですが、沖縄で結婚して、戦争を経て、沖縄に定着してしまったというのが小山家の歴史なんです。

奥のむら興しのために奥の人と一緒に（奥みどり）をつくったということなのです。

3. 護郷隊で恩納岳へ

糸満盛明（昭和三年十一月十六日生）

（糸満）私が入隊したのは防衛隊ではなくて護郷隊です。三月に奥から役所に十二時にみんな集まって、役所から恩納岳までぶっ通しで歩いていきました。訓練という訓練もせずに、恩納岳まで食料も運びながら行きました。いろいろ難儀もしました。

護郷隊というのは敵への切り込み隊です。敵の陣地に爆弾を持って行って爆発させるのが役割。そういう訓練をしました。成功したことはなかったんですけどね。恩納から石川、金武あたりです。

とうとう勝ち目はないなと思ったのは、恩納岳は全部敵のアメリカに包囲されていることがわかったからです。逃げようにも逃げようがなかったんです。それで、僕らの一中隊は、その夜、こっそり抜け出して、東村の有銘まで逃げました。そこで部隊長が解散命令をだしました。それぞれの自分の出身地の集落に帰るためにグループに分かれて国頭村を目指しました。その

前に斥候(敵軍の動向や地形を密かに探る兵士)を出して敵の陣地を調べさせました。そこを通過して逃げられるかということ。

有銘から、大保に来たときに、田んぼがあって暗渠がありました。そこから、塩屋湾に出て、夜塩が引いたときに渡ろうとしたら、敵に発見されてしまっただけで照明弾を打たれ、機関銃でバラバラやられました。それでみんなバラバラになりました。僕と比嘉久雄（昭和4年生）と宮城長栄（昭和3年生）の3人。僕はちょうど敵がいなくなったのでそのまま泳いで渡りました。裸でした。着物は頭の上のせていたのですが、敵に発見されたから全部捨てて泳いで行きました。

岸が上がっていったら、塩屋の屋古辺りでした。海原まで行ったら、そこで赤ちゃんが泣く声がありました。夜ですよ。そこに行ったら、おばあちゃんとおかあさんと赤ちゃんがいました。「食べ物ありませんか?」と聞くと、「ここは毎日アメリカが来るから」と言って缶詰をくれました。

塩屋を渡ったのは私たち三人だけで、ほかは引き返したようでした。田嘉里だったかな?そこで食料を探していたら、奥の人に会いました。それでこれからはずっと一緒に左手まで行きました。そこで仲真浩（昭和4年生）と上原英昭（昭和4年生）に斥候をさせたんですよ。朝起きたら煙が見えるものだから、そこに行かせてみたらアメリカがいるわけですよ。びっくりしました。それで川縁で一晩すごしました。その夜は大雨で体の半分は水につかっていたのですが、疲れていて気が付きませんでした。

アメリカを突破することはできないので、伊地の方に引き返しました。伊地の避難小屋にいる時に、伊地出身の人に「自分はこういうことで護郷隊に入り、ここまで逃げてきた。伊地出身の人にも知っている人がいる。」と話すと、おばさんが「奥の方は辺土名にいる」と教えてくれて連絡をとってくれました。それで翌日奥の人たちがいる辺土名へ向かいました。途中アメリカに会うことはありませんでした。とても恐くて避難民の格好をしていました。それでなんとか辺土名にたどりついたのです。

その時はまだ山原から来ていなかったの、辺土名の上原信夫君の家で世話になりました。たいしたケガもなくなんとか辺土名までたどり着きました。今思うとたいへんなことですが、当時は何も恐くなかったです。怖さはわからなかった。当時はそういう教育を受けたからです。当時は骨と皮に痩せていましたが命拾いました。亡くなった方には申し訳ないですが。

与那城定秀（大正3年生・与那城ヤスさんの御主人）、その方は先に帰ったんですよ。喜瀬武原で米軍を監視していたんですが、その時に米兵に見つかって殺されたんです。

辺土名で奥の人たちと合流しましたが、うちの家族はまだ辺土名に来てなかったです。だから直帯さんの家族や奥の人たちと一緒に奥に戻りました。栄門（イージョー）とうちとじゃないかなチヌフクに最後までいたのは、うちのおじいさんとおばあさん、そして母のおかあさんと三名は、おじいさんがつくった2軒半ほどのハルヤーにいました。芋をつくっていたから、食べ物には不自由なかったそうです。私の両親はまだ若いから避難していました。

（島田）よけいな笑い話ですが、そのおじいちゃんはちょっとおもしろい人で、ライターのことを「ていぬさちからびーぬでたん」（手の先から火が出た）と言って有名なひとでした。

（糸満）はい、共同店をやっていたのはうちのおじいさんですね。糸満盛守（明治10年生・糸満小（イトマンガウワー））といいます。

（宮城）奥に戻られてからはどうなされていたのですか？

（糸満）最初農業をしようと思っていたのですが、宮城親栄（明治32年生・六ツ又仲）さんが売店主任でしたから、頼まれて共同店で勤めていました。その後、山口に養鶏関係で研修に行っ

て帰ってきたら、郵便局で働いてくれと頼まれて郵便局員になり三十年くらい勤めました。退職後はぼちぼち農業や盆栽などやっています。

(宮城) 護郷隊に奥から一緒に行った人はどなたでしょうか？

(糸満) 僕と、宮城長栄、比嘉久雄、中真浩、上原秀昭、平良保二等だったと思います。なお、上原信夫は一年前に行っております。

(2, 3は2011年3月12日那覇市真地公民館にて。聞き手：島田隆久：宮城能彦)